謝辞

肌を刺すような冷たい風が、暖かく心地よい風になってきました。今日私たちは卒業の日を迎えます。四年前、この場に立っていた私は、この山や田んぼで囲まれた地で、一人でやっていけるのか、自分の夢を叶えることはできるのか不安でいっぱいでした。最初の頃は、夢をかなえるためにとにかく机に向かってひたすら勉強をしよう。そればかり考えていました。

しかし、大学で様々な活動をしていく中で先輩方との力の差を痛感しました。そこで、今の自分たちに足りないものがはっきり見えたのです。それは「人間力」でした。

人間力を向上させようと、積極的に活動の中心的存在で動いたり、新たなことに挑戦したりする機会を与えてもらった時は、必死に仕事をしました。しかし、先輩のようにうまくいくことはそうありませんでした。失敗の連続で、投げだしてしまいたいと思うことが何度もありました。でも、その時失敗と向き合い、逃げずに前に進もうと努力したことが、自分を変えるきかっけとなり、自分の力になっていきました。また、失敗をしたとき、私の周りには、同じ志をもった心強い仲間がいました。一緒に泣いて一緒に朝から晩まで支え合いながら活動をしました。そんなかけがえのない仲間ができたことも、この四年間の私の財産です。

失敗を繰り返し、挫折を乗り越えた私は、これからどれだけ苦しいことや大変なことがあったとしても、この四年間で学んだことを思い出し、負けずに立ち向かっていくことができると自信を持って言えます。

私は、小学生の頃からよく先生に「もっと自信を持て。」と言われてきました。それは、心から、自分は成長した。と思える経験ができなかったからだと思います。卒業を迎える今日。私は自分に「あなたは成長した。」と伝えたいです。

成長することができたのは、岐阜女子大学というこの場所でしか学べないことを学び、自分を見つめ直す機会をたくさん与えてもらったからです。岐阜女子大学には深く感謝申し上げます。これから、この大学でつけた力を、今度は平和で豊かな日本のために使っていきます。

この四年間支えてくださった、学長先生、理事長先生をはじめとする先生方、故郷で私の頑張りを見守り続けてくれた家族、いつもそばで励ましてくれたかけがえのない仲間に御礼申し上げるとともに、岐阜女子大学並びに関係者の皆様のますますの発展を祈念致しまして、謝辞とさせていただきます。

令和二年三月十六日

卒業生代表　静岡県出身　五十右摩優